

翌朝。

一日で終わるはずもない事情聴取に、ハナは引き続きここオフィスを離れていた。春山の家宅捜査を終えたストラヴィンスキーも渡会と二人三脚、ヘリで現れた二人の家へ向かっている。現場が鎮火したのは半日以上が経った夕方だ。現場検証へ向かったハートもここにはいなかった。百合草に至っては初めてその名を知らされた赤いスーツの彼女、曾我伊織《ソガイオリ》から指示を受けると言っていたように出掛けておらず、乙部もまた確認したいことがあるとパイロットが勤める民間エアポート会社へ向かい、もちろん陸路でだ、すでにいなかった。

なら百々とは問われたなら、言われたとおり朝八時半、借りた仮眠室でテーブルに向かいひし、とペンを握りしめている。前にあるのは「規則の順守と安全の確保」と書かれた冊子とレポート用紙の束だった。

そう、百々に仕事を与えられるなど愚の骨頂。あてがわれた役割とは冊子を読破し内容をレポート用紙十枚にまとめるといふ、指示を無視してクレーンを傾けたことに対する処罰、その反省文の提出だった。

しこうして百々はあらん限りの力でペンを握り締める。対峙した用紙へつむじ風を巻き起こすほどの力で書くのだ、という気合をぶつけた。だが何をと、考えは考えを要求し決

意を揺るがす。

十枚。

それは鉄壁。まさにアスリートの枚数だった。

だからして何でもかんでも片っ端から書かねば終わらず、とにもかくにも最初の一文字だ。刻むべく上段の構えと腕を振り上げる。気合一発、レポート用紙へペンを突き立てた。が、やはりその先が続かない。引いた線は力を失い、とたんあさつての方向へ流れてはみ出す。それきり百々もテーブルへと突っ伏していった。

「だめら。眠ひ。意欲が湧かなひ。じゅ、十枚は多過ぎるよお。提出するまで帰れないなんてコレ、拉致だよお」

気を紛らわせるためつけたテレビは「自然の猛威」とテロップを入れ、ちょうど傾いたクレীনを映し出している。

「だから、ごめんなさいい。それ、あたしですう。もう二度とやりませんう」

詫びを入れて、重い頭をよいしょで持ち上げる。改め腹へ入れた力で足を振り上げたなら、かける暗示で再び用紙と向かい合った。

「よおっしつ、書く。とつとと書くつ。わたしは書くぞおっ！」

否や、暴れる獲物を取り押さえるかのごとく、ガバと紙面へ覆いかぶさる。それきり一

心不乱にペンを走らせた。止まることなく一気呵成と走らせた。わきあがる言葉も湯水のごとく、神がかり的執筆意欲で走らせ続けた。

……はずだった。

が、止まる手。

用紙へかじりついたままだ。百々はおずおず頭をひねってゆく。

「つてさ……」

それはずっと気になっていたことである。

「なんで、ここにいるの？」

隣には、文庫本を読みふけるレフがいた。サイズさえコンパクトでないなら正直言って邪魔でしかない。

「あの、もしもし？ みんな捜査に出てるよ」

余計なお世話で促してみる。だが文字を追うレフの目が本から逸れることはない。

「俺には俺の仕事がある」

言い分には百々の目も白く濁ってしかりだろう。

「ふうん、ここで油売ってるのがお仕事ですか」

何しろノータイでこそあれ見るたび白いワイシャツに冴えない色のジャケットとスラッ

クス姿だったレフは、今日に限って銃も携帯していなければアイボリーのニットにラフな綿パンツときている。様子は休日の昼下がりでそのもので、そんなレフの指先でまた本のページは優雅とめくられていた。

「お前の書いたレポートをソガへ持っていく。それが俺の仕事だ」
言う。

ああ、なるほど。

うずきかけて百々は全力で押し留まった。

「じゃ、じゃ、それまでずっとここにいるのっ？」

「目を離すなど言われた」

事実にはパクパク空を食む口の動きが止まらない。ままに正面へ向きなおっていった。再びどうっ、と用紙へ崩れ落ちる。

「いやだあ、よけいに書けないよお」

すぐにも気づかされて、ひねった首でレフを見やった。

「もしかしてそれってこの間の命令、の続き？」

案の定、レフに答える様子はない。涼しい顔でひたすら本を読み続ける。要するに見解には間違いがなさそうで、今度こそ百々はテーブルに顔面を擦り付けていた。

そう、レフもまた百合草がここを離れている間、捜査からハズされたのだ。だからして昨日にも増して愛想が悪い。様子には相当無理をしているんだろうなと思えず、そもそも「書類運びが仕事だ」などと似合わないにもほどがあった。

おかげで百々の文句も費える。仕方なしとくずおれていた体を持ち上げていった。つまり知らないことを尋ねてしまったと思うからこそ、持て余す視線をペン先へ落とす。代わる話を持ち出していた。

「それ、何、読んでるの？」

そんなペンはどうやら百々用に封を切られたものらしい。傷ひとつないうえにピカピカとペン先を光らせている。

「やっぱ英語の本とか？」

握りなおして今一度、その感触を確かめた。

「レフってさ」

書き心地を試して右へ左へ振ってもみる。

「アメリカのどこ出身だっけ？」

それすら持て余し始めたならテーブルへ置いた。

「西とか東とかいうじゃない」

「手が離れた」

飛びくる注意に握りなおしたその構えは「すぐさま書きます」のポーズを極める。

「ロシアだ」

レフが答えていた。

「ロシア……」

「だが俺の中には四分の一、日本人の血も流れている。母方の祖母が日本人だった。その祖母は俺に日本語でしか話しかけてこなかった」

書かれた文字を読み上げるように教えてレフは、またページをめくってゆく。

「それで日本語うまいんだ」

なら百々の脳内へ広がってゆくのは、まだ見ぬ広大な北の大地だろう。

「へー、ロシアかあ。ウォッカにモスクにマトリョーシカ。ピロシキ、スターリンに赤の広場。ドフトエフスキーの国だね。じゃその本、ロシア文学？　だったら読みがいあるよ」

しかしそうではないらしい。

「違う」

レフは言う。

「じゃ、何？」

「一級を受ける」

「いつ、きゆう?」

言葉が抜けすぎて問い返すかない。

「漢字検定だ」

「……は?」

固まっていた。

「これが思ったより難しい」

だからしてロシア人のジョークは真剣に言うところに面白みがあるのか。

「あつ、あつたりまえじゃん。普通さ、もっと下から受験するもんだよ。段取りつてのがあるじゃん。段取りがさっ」

とりあえず笑えそうだったので、笑ってつつこむ。

「準一級は、もう合格した」

返されて今度こそ黙っていた。

いやそのときテーブルを抱えて百々は遙か彼方へ身を引く。こやつ何者。言葉を過らせ、ただ片眉だけを痙攣させた。と、レフの目はそのとき初めて本から逸れる。

「悪いか」

なぜ睨む。

「ない、ない、ない、ないですっ」

おかげで首を振り返すのも命がけだ。再び本へ向き直ったレフので横顔はウソつけ、といわんばかりだ。

「さっきから、手が止まっている」

「はぁいっ!」

言うものだから百々は、おののき用紙へしがみついていた。

「……オ、オタクだ。西洋の漢字オタクだよ。っていうかいつ勉強してるわけ? どれくらい勉強してるわけ? おかしい。絶対おかしいよ……」

「聞こえているぞ」

収集がつかず頭を抱え込む。

「あー、もう散々っ! 難しいっ、眠いっ! 集中できっこないっ!」

「まるでターザンの雄叫びだな」

一瞥したレフがのそり動いていた。背を向け足を組みなおす。

「またサファリの映画でも見たのか? 昨日は試写だったんだろう。どうせなら文豪の生涯でも見てくればよかったんだ」

などと嫌味は「ジラフアタック」が通信に乗っていたせいにほかならない。今では知らぬ者がいないほどの名文句になると、弁解に直前、見た映画の解説なんぞをつけ加えたせいで、状況はさらに悪化の一途をたどっていた。

「昨日の映画はサファリじゃありません。昨日のはっ！」

言わずにおれず、そして口にしたからこそ百々はその先をのみ込む。次の瞬間にもぼふん、脳天から火を噴き上げ、上げた拳でレフの背中をぽかすか殴りつけた。

「なんだ。顔を赤くしてまで怒るほどのことじゃないだろ」

様子にレフが目丸くして振り返る。だが今度は百々が答えない番だった。顔も合わせずテーブルへかじりつく。とたんペンは先ほどまでのことが嘘のように爽快と走り始めていた。

もうそれしか残されていないのだ。まだ葬る先すら決まっていけないなら、いつもどおり終えた「20世紀CINEMA」の遅番、その後に見た次回上映作にまつわる一部始終を忘れんがため、百々は反省文のアスリートになることを誓う。

パスボム。

バスタブに投入すればぶくぶく泡を吹いて湯船をたちまちパステルカラーに変えるお風

呂の友、それが次回上映作品のタイトルだ。そこから連想できるのはメルヘンチック、もしくはファンタジックなストーリーだろう。だが実際、映画は〆指定。芸術と謳うからこそモザイクのなしのめっぽう過激な作品だったのである。

主演は、監督に発掘されてこれがデビュー作となる謎の新人、ナタリー・ポリトゥワ。監督は数年に一度しか作品を発表しない巨匠、スタンリー・ブラックと、取り合わせの話題性も抜群だったが、それでも真夜中、知った顔と並んで見る映画でないことだけは確かだった。

ネイチャードキュメンタリーを鑑賞した後のように、威勢のいい感想など出はしな。明かりの灯ったシアターで百々はひたすら笑い続けていた。

「あ、あは。こんな映画だったんだあ」

前回同様、田所はそんな百々の隣にいる。

「ポスター、道端に貼れるのか？」

言う目は、手元のチラシを吟味していた。定まらぬ視線の行き先を見つけて百々も、辛うじてわいせつ物陳列の罪に問われないですみそうな具合にタイトルを配置したそれへ食いつく。

しかしながらこの映画、光の扱いがとにかく巧みで、見る者を幻想的な世界へ引き込ん

でやまなかった。その中を偽ることなく自身の思いに率直と跳ね回る主人公は、だからこそ時代を先行く異端者として描かれている。ゆえに周囲との溝を深め、生死を問うまで心を病んでゆくセンチティヴな展開は、織り込まれた過激な映像こそ主人公の純粹さを際立たせることとなり、ひいては自由と解放、偏見といわれなき集団からの圧力を観賞者へ印象付けるつくりともなっていた。気づけば上映も終盤、彼女へ感情移入してしまうことで己が価値観の棚卸さえさせてしまうあたり、なぜ全年齢対象にしまったのか問わずにおれなくなるほどの良作でもあったのである。

「あれだな」

田所が口を開く。

「え、ど、どれっ？」

見つめすぎたチラシから百々は視線を跳ね上げた。

「タイトルがまだこれで助かった」

「ああ、タイトルか」

「じゃなきや何だ。」

「っていうことは、あたしが来る前にもモノスゴイのあったんだ」

確かめれば思い出したらしい、田所はその口をアヒルと尖がらせ考え込む。

「今言うのは、やめとくわ」

いや、余計に想像が膨らむじゃないか。百々が思ったところで声は例のごとく二人の間へ割って入っていた。

「あれ？どうしました？」

水谷だ。

「今日は鑑賞後の会話が弾まないみたいですねえ？　なかなかの名作だったじゃないですか。はい。じゃメモ、預かりますよ」

一言、多いが事実だろう。水谷は二人の手元からメモを回収してゆく。

「そうですねえ、田所君はだいぶ慣れて来たようだし。映写の方でもメモだけ預ければ大丈夫だって言っていたから、今日はここで上がってもらってもかまわないですよ。ま、百々君の方はご愛嬌かな」

ペラペラとめくったそれをぼん、と手のひらへ打ち付けた。

「はい、お疲れさま。帰り道にでもちゃんと話し合っておいてくださいね。ただのポルノ映画だと宣伝されちゃ困りますから」

それはよく分かっているのだが、なかなか目に焼きついたものがそうはさせてくれそうにない。

そんなシアター後方、映写室ののぞき窓から映写係、松川が顔をのぞかせる。コンコン、とガラスを弾いて水谷を呼べば、見上げた水谷はいかにも失敗した、という顔で手を挙げ、それきりシアターを後にしていった。

「セ、セクハラだ」

きつとセクシヨンCITのことを漏らさないからに違いない。

確信が拭えないまま再び百々が田所と肩を並べたのは表通り、着替えもすんだ帰り道だった。

「ああ、上映はじまっちゃったらあの映画、最低でも二週間は流れるんだあ。辛いなあ」
ミントグリーンのトートバックを肩に百々はうなだれ歩く。田所もまたヘルメットを抱えると、デイバッグを引っ掛けていた。

残念ながらというべきか、我が「20世紀CINEMA」には駐車場がない。社用車や通勤車は百々も帰りに前を通るガレージに預けてあり、多分にもれず田所もそこにバイクを停めていた。

「まあ、それが飯の種だからな」

割り切る田所は大人である。

「けっこうみんなには見に来てって宣伝してんだよ。けどこれじゃ言えないしき。選ぶのは

支配人だって分かってるけど、うちは普通の映画館じゃなかったっけ？」

百々の愚痴は尽きず、うちにも自動販売機が明々光を放つガレージ入り口は見えた。回り込んだところにずいぶん無理をして買ったという、田所のカワサキのスポーツ二輪もまたのぞく。

「けど良いことは良い映画だと思うな。今度のオスカー候補だって話だし。支配人の読みは間違っていないと思うぜ」

目指し、フルフェイスのヘルメットへ頭をねじ込んだ田所のいでたちは、まるで宇宙にでもいきそうな具合だ。

「ただ……」

「ただ、なに？」

付け加えられて百々はその顔へ眉をひそめる。

「それで賞でも取ったりしたら凱旋上映とかあるかもってこと」

教えて田所はひょいっ、とバイクへまたがった。

「ええっ！」

跳ね上がった百々はいえ、すぐにもひし、と両手を握り合わせている。

「当たるな。当たるな。当たるなあっ！」

放つのはありったけの呪いだ。

「それ、営業妨害」

バイクヘキ―を差すついでに田所は、そんな百々へもクギを刺す。

「だって主人公がさあ……」

言わずにおれないのは先刻とおりで、だがその先は不本意にも飛び出したあくびに遮られていた。

「あふ。今日こそ寝よ」

言葉に、キ―を捻りかけていた田所の手が止まる。握りなおすと今度こそ捻ってスタン・ドを跳ね上げた。

「お前だって、そうも言えないんじゃないの？」

軽く身震いしたバイクから熱いガスが吐き出されて、目尻に浮かぶ涙を拭った百々は、いやにぶつきらばうな田所に違和感を覚えて首を突き返す。

「ん？」

そこで目もくれずアクセルをふかす田所は、そのたびに振り上がるタコメーターの針をただじっと見つめていた。

「今、俺さ、映写、教えてもらってるんだよな」

「へえ、知らなかった。タドコロ、スゴイじゃん」

何しろフィルムは肝心要の大事な商品だ。アルバイトならなおさら誰でも触れられるようなものではなかった。

「昼間はカウンターがあるし。朝、早い時間帯にな。今日も同じ」

「じゃ、遅番じゃなくて中抜けシフトだったんだ。さすがっ！」

「お前さ」

お疲れ様、と頭を下げた時だ。やおら言葉は投げつけられていた。

「駅前で車から降りてたろ。俺、バイクで前、通ったんだ」

驚かされて百々は下げたばかりの頭を上げてゆく。

「送ってやるっていったのに断ったのは、そういうことだったんだよな」

ヘルメット越し、そんな百々をチラリ盗み見る田所の眼差しは痛い。残してそれきりまたタコメーターを睨みつける。

「あれ、ストーカー騒ぎの時の男だろ？ 百々ならうんざりするほどまくし立てるかと思っ
たわりにあんまり話さないからおかしいな、とは思ってたんだ」

その通りと「20世紀CINEMA」での春山の一件は、そこに居合わせたそれぞれに
百々目当てのストーカー騒ぎだったと説明されていた。もちろん話を蒸し返さなかったの

は蒸し返したところで言えない事だらけで、田所ももう忘れたのだろくらいに思っていたのだ。

「ああ、あれは……」

「知って驚いた。やっと一月、経ったくらいの話だしな」

などと続ける田所は明らかにどこかおかしいと思える。だが百々にはそもそも田所が、何に驚いているのさえ解せなかった。おかげで瞬きばかりが増えて、飽和したところではないにその脳天からびっくりマークに汗を吹き上がらせる。そう、田所が言わんとしているのは「男の車で朝帰り」だ。

「どおっ。あああっ！ ええっ？」

「俺も馬鹿だからさ、間拔けた後輩が気になって就職の話、蹴って残って、映写までやる気になってさ」

だというのに田所は言い出し始める。

「それはそれでいいんだ。何も言わなかったのは俺だし」

きつと地球は今、逆回転していた。

「けど俺、わりかし古いみたいで。映画じゃないなら正直、お前にがっかりした」
しかしながら正転中とバイクのヘッドライトは灯される。下ろされたサンバイザーが掠

れた音を立て、掻き消しエンジンが二度、噴かされた。果てに気抜けたような挨拶は田所の口から投げられる。

「じゃな、気をつけて帰れよ」

放されたブレーキに空回るタイヤが白煙を吹き上げていた。ひきずりバイクは通りへと飛び出す。

「ちょ」

追いかけて振り返ったのは、せめてその一言だけでも聞いてもらいたかったからだ。

「ちょっとタドコロ、それ……」

「ちがーうっ！」

叫んでいた。

大声に弾かれレフが振り返る。怪訝を越えたいかつい視線は明らかな警戒モードだ。そら何の脈絡もなく突然、叫ばれたなら、誰だって心配する以上、怪しむ。まさに懸命に文字を書きなおす百々の手元をのぞきこんでいった。

「字を間違えたくらいで叫ぶな。驚く」

「そうですね。これじゃ検定会場にもいられないもん」

なにしろ何も悪い事など、後ろめたいことなど、何一つしていなかった。むしろあの夜は悪党と闘っていたのだ。などと言えばコントのような響きは拭えなかったが、それなりに自分は危険と対峙していたのである。

だからといって対テロ組織に加わっているなどと、あの朝に至ってはテロリストを捕まえるために夜っぴいて工事現場でクレーンをぶっ倒し、挙句、テログループが明日にも重要なプロパガンダを公表するかもしれないくだりを知ったのだなどと言えはしなかった。そもそも口外することは許されていなかったし、加えて信じてもらえるよう説明できる自信こそ百々にはなかった。

幸いなことを言えば次に田所と同じシフトへ入るまで数日ある、と言う事実だろう。動揺の始末をつけるにはギリギリの、それは期間でもあった。だとしてこれから田所へどんな顔を向けばいいのか。それが全く分からない。

「そのうえ反省文って？」

ついぞ独り言はもれていた。

「あたしは……」

その口へかませる栓があれば欲しいところだが、ないのだから前後なき咆哮は二度目と放たれる。

「悪いことなんてして、なぁーいっ!」

と、本を閉じる音は隣から聞こえていた。

「……一度、休め」

下ろしたまぶたでレフが言う。

瞬間、開いたのはこの部屋のドアだった。

「喜んで、ここでの仕事は一旦保留よ。今すぐ高速に乗って」

ヘッドセットを装着したまま曾我は姿を現す。その手からホルスターごと銃はレフめがけ放り投げられていた。

「高速?」

受け止めたレフへ向け車のキーも弧を描く。

「詳細は移動中に」

それも掴んだレフの手が銃の動作を確かめた。

「それって SO WHAT ですか?」

背筋も伸び上がって当然だ。百々もすかさず曾我へ問う。

「ここはそれ以外では動きません」

返す曾我はどこかしら誇らしげもあった。

「恩に着る」

まるで上着でもを羽織るような具合でホルスターを背負い上げ、レフが立ち上がった。そこからドアまで、ひとまたぎもありはしなかった。

「わたしはオフイスで遊んでいる人員がいることを進言したまでです。判断はチーフが」
告げる曾我の傍らをすり抜ける。背は振り返ることなく部屋を後にしていた。

「あつ、自分だけズルいっ!」

前にしたなら百々こそじつとしてはおれないだろう。ペンを投げ出しトートバックを掴み上げる。

「あ、でも百々さんは……!」

頭数に入っていない。言いかけた曾我の脇を脱兎のごとく駆け抜けていた。その足は案外と速いらしい。後ろ姿はあつという間に折れた通路の向こうへ消えて、追いかけて曾我が身を乗り出した頃にはもう、閉まりつつあるエレベータの中でレフと肩を並べている。

どうしたものか。思案する曾我がしばし空を睨んだ。

「ま、いっか」

吐き出しマイクをつまみ上げる。

「聞こえている? 春山の仕掛けがまだ残っていたわ」

テーブルには、書きかけのレポートと漢字検定の問題集が放り出されていた。呼び掛け
て後ろ手に、曾我はそんな部屋のドアを閉める。

「ディステイニースタジオ・ジャパン。高速に乗ったならそちらへ向かって」

開きゆくエレベータの扉がじれったい。こじ開けたレフに続き百々も飛び出す。

一体、誰が磨いているのか。ワインレッドのワゴンは今日も新車同様、定位置にあった。乗り込めばすぐさまエンジンが唸り声をあげ、振るわせワゴンは車庫を抜け出してゆく。告げる曾我の声も絶妙と、言わずと知れた人気映画のアトラクションとキャラクターが大人気のテーマパークへハンドルを切った。

「ナビを任せるぞ」

「もちろん。高速だよっ！」

台風一過の突き抜けるような青空の眩しさに、返し百々は目を細えめる。

「ターゲットはそこへ移動中の蒜山《ヒルゼン》観光バス。爆発物搭載の危険ありよ。ナンバールと必要な情報は地図に添付して端末へ送ったわ。確認して」

続く曾我の言葉に早々、虚を突かれて見開いていた。

「行きの、バス？ ディステイニースタジオじゃなく、行きのバスなのか」
レフも違わず問い返している。

「な、何かの間違いとか」

「あ、二人とも謹慎が解けたんですね」

そこへ割り込んできたのはストラヴィンスキー声だ。言われように、百々、レフ共に「ぐ」と喉を詰まらせたことは言うまでもない。

「ちようどいい。外田さんから説明してもらおうわ」

知る由もなく手間を省いて曾我は促す。

「了解。えっと僕は今、春山が社員寮に入る前に住んでいたアパートへ来ています。社員寮、やっぱり空振りだったんですね。そもそも彼は迎えを信じていたわけですし、相部屋でしたからそう重要なものなんて残されていませんでした。で目線を変えてみたわけです」
確かに寮に入る前、橋の下で生活していなければ家はあり、住まいしていたのが一ヶ月前までなら探るだけの価値はありそうでなかった。

「新しい入居者は？」

レフが確かめ口を開く。

「と、思いますよね、普通」

あいだにもワゴンは国道へ合流する。インターチェンジを目指して走れども、途中、もちろん心地よいほど信号に引っ掛かることはない。うちにも看板は高速の入口を示して頭

上を通過して行った。

「アパートは寮から歩いて十五分程のごく近所。確かに鍵は社員寮への引越しと共に返却されていましたが、家賃を支払うからということで契約は今日まで。住んでいなくとも部屋自体は春山名義で残されていたんです」

「へー、珍しいことをするんだね」

それは百々の素直な感想だ。そして行動が不可解であれば理由を知りたく思うのは誰もが同じようだった。

「ですよね。というわけで令状が下りるのを待つのもどうかと思って、ぼく、大家さんの見えないところでドア、蹴破ってみました」

明かされる、ありがちなながらもアッパレなくだり。

「中は？」

せかすレフがウインカーを出す。

「それが契約が切れたならすぐにも次の人が入れるよう、寮とは比べものにならないほど片付けられていました。SO WHAT の痕跡どころか春山の生活臭すら皆無です。けれど……」

言葉はそこで切られる。一呼吸おいたストラヴィンスキーは、やがて続きを吐き出して

いた。

「それだけが残っていたんです」

「高速へ入る」

低く知らせたレフの声に合わせて、車間を詰めたワゴンが螺旋を駆け上がってゆく。左回りでインターへと侵入していった。

「植木鉢だけが、土まで入った状態で残っていたんです」

なら百々に想像できるのはこの辺りが限界となる。

「お花、好きだったんだ」

「そう見えたのならめでたい奴だ」

レフに瞬殺されて目をすわらせた。

前でETCを潜り抜けたワゴンは他車と合流する。追いかけるにうってつけな車の流れは良好で、見通しもよかった。

「そういうことです。以前、使っていた人の持ち物がのこっていることも珍しくありませんし、春山を知らなければなおさら何とも思わないはずですよ。クリーニングが入ったとしても植木鉢くらいなら何の疑問もなく片付けちゃうでしょう。けれど証拠隠滅のために念入りと部屋を片付けたはずが、植木鉢だけ残すうっかりこそわざとらしいですよね」

そこでようやく百々の口も「あ」と開いて息をのむ。

「でまあ、大家さんにも無断で入っちゃったことですし、ぼく、ここでもやっぱりこっそり植木鉢を割ってみることにしたんです」

「これ、何の番号かしら？」

六畳たらずの狭い取調室。格子ががちり食い込んだ窓は、いかにもここが隔離された空間である事を知らしめていた。案外、丸くてポップな色合いのコタツが何かあったら犯人もついうっかり気を許して自首してしまうのではなからうか。思ったことがないわけでもない。しかしながらハナの前には今日もグレーのスチールデスクがあり、挟んだ向かいにはすっかり意気消沈した春山の姿があった。

「それとも水をやれば花が咲く予定だったのかしら？」

傍らでは事の次第と成り行きを、渡会率いるコート軍団の一人が見守っている。そしてこの構図もまた昨日からなんら変わらないもののひとつだった。

「そんなわけないわよね。これ、あなたが前に借りていた部屋。そこに残されていた植木鉢のひとつから出てきたメモよ。危なかったわ。明日、新しい住人が入るところだった。どう、覚えがあるでしょ？ いいえ、覚えられないから残したんじゃないかって？」

机に置いた紙片をコツコツ、指で弾く。その音にさえ身を縮めると春山は、さらに深くうつむいていった。

「もちろん、あなたの所持品にこの部屋の鍵はなかった。いまさら関係ないって言うかもしれない。けれど時間があればわたしたちにだって鍵くらい見つけることはできると思っているの。この番号は、だから部屋に残されていた。あなた昨日の事件の後、まだ何かするつもりだったんじゃない？」

首をかしげ、ハナは春山をのぞき込む。せめてイエスカノーで示してくれたなら救われるようなものを、しかしながら春山の態度が変わることはなかった。

「……あのへりは、迎えじゃなかったんですか？」

消え入るような声で同じセリフをただ繰り返し返す。ハナは大きくため息を吐き出していた。「彼らはそう言っているわね。あなたに雇われたって。見返りに受け取ったという現金の封筒から、あなたの指紋も確認されたわ。昨日も言ったはずよ」

「違います」

これまた寸分たがわず春山は遮る。だがその先がどうしても続かなかった。もちろん満足を口を開こうとしないのは黙秘を通したいからではない。いまだ置かれた立場を理解できず混乱しているせいに違いなかった。ならば、とハナは乗り出し気味だった体を下げる。

多少話が逸れたところで今一度、同じ話を言って聞かせる気持ちを整えなおしていった。

「ヘリの二人は拾ったあなたから行先を聞くつもりだったと言っているわ。それを鵜呑みにできないことも確かよ。けれど信じるだけの証拠がないわけでもない。ならあなたが考えるべきはこうじゃないかしら？ あなたはハナから仲間と認められていなかった。だのにダミーまで飛ばして派手な逃走劇は展開されている。つまりあなたは彼らにただ利用されただけだった。それが何だったのかをね」

しかし一度、固定されてしまったシナリオが、そのルーチンから逸れる気配はない。

「行き先なんて知るはずないです。現金は俺が SO WHAT の活動を支援するため指示とおりロッカーへ入れただけで、あの二人に渡すためじゃありません」

そこに断固否定する力強さはなく、それだけに巧みと嘘をついている様子も見受けられなかった。むしろ他に持ち合わせていない言い分に繰り返す事へうんざりしたような響きすら漂わせる。

「それも犯行予告同様、利用するために仕組まれたものだとは思えないかしら？ いいことと」

それでも根気強くハナは呼びかけ続けた。

「ヘリの二人は加担した話が想像以上に大きかったことを知って無関係を証明するためとて

も捜査へ協力的よ。おかげであなたの立場は黙っているだけで、どんどん悪い方へ転がっている。脅しじゃないの。それでもいいと言うわけ？」

暗に違うと示して一息入れる。

「確かに、あなたが劇場で使用した爆発物から SO WHAT との関係を証明する物は出てる。あなたが接触したのは間違いなく彼らだわ。ゆえに自身の言い分が正しいことを証明したいなら、あなたは SO WHAT とのつながりを明らかにするしか手がないの。知っていることを話さない。いっどうやって知ったのか。爆発物をどうやって手に入れたのか。そしてこの番号はなんなのか？」

考え、決断させるだけの時間を与え、ハナは黙した。言われるたびに忙しく足を揺する春山は、それでもまだ迷走する思考のまま膝頭へ落とした視線を泳がせている。そうして昨日が費やされたなら、埒が明かないと判断するにもう十分な時間は過ぎていた。

「いい加減、認めなさい」

うんざりした気持ちを隠す理由がない。

「あなたは信じた。けれど彼らは最初からあなたなんて必要としていなかった。みじめだろうけれど、ここですべてしているならそれは認めざるを得ない事実だわ」

詰め寄れば、その強さに初めて嫌悪を覚えたのか、うつむいていた春山の顔の中で目だ

けが初めてハナへと裏返った。

「一番、楽しい思い出は、何ですか？」

問いかけは唐突だ。少なからず虚を突かれてハナは口ごもる。だが、だからと言って春山は明確な答えを求めているわけではなさそうだった。再び視線を膝頭へ落とす。小刻みと揺らしながら途切れ途切れと話し始めていた。

「本気、でした。だからひどく楽しかったですよ。捕まっても、どうなってもいい、と思えるくらいにね。けれどそれも、だから、それも『与えられた娯楽』だってことだった。利用されたってことは、そう言う意味なんですよ。僕は騙されてその気になった。そんなじゃ、革命なんて加われない……」

それきり続いた沈黙は異様なほどに長い。しかしながらいっしか止んだ春山の貧乏ゆすりに、一点を睨む視線は思いつめた何かを予感させ、次に飛び出す決定的な言葉の気配をちらつかせた。

「迎えが来なければ」

果てに放たれた声は高ぶる感情に震えている。

「死ぬ、覚悟はしてたんです……」

「爆発物は、その一点だけが春山の自作。迎えが来なければ搭載済みの観光バスを拝借して爆弾ごとディスティニースタジオへ突っ込むつもりだったそうです」

あっけらかんとストラヴィンスキーが明かして言った。

「なんっ……」

二の句が継げず百々は呻く。

「それがバスに爆発物の理由か。それで番号の意味は？」

「爆弾の解除番号だそうです。破棄しきれず万が一のためにとっておいたそうです」

「番号も地図と一緒に送っているわ。確認して」

反して飲み込んだレフの口調は早く、ストラヴィンスキーが答えたなら曾我もすかさず指示してみた。

「あとハルヤマは SO WHAT について何か話したのか」

「それがその後わんわん泣いちゃって、話もできない状態だそうです」

返答にはさすがのレフもなんだそれは、と表情を渋くする。

「で、だ。ま、まあ夢破れた後だもん。すごいショックなんだよ、うん」

フォローに回れば、百々の立ち位置こそ自身でも謎を極めた。

「バスは現在、七キロ先を時速八十キロで走行中です」

「まったく、迷惑なうえに面倒臭いヤツだ」

教えるオペレーターにハンドルを握りなおしたレフが吐く。

「分かった。バスを発見次第、乗客を避難。爆発物の確認と番号での解除にとりかかる。乗客の移送用に代替車を用意してくれ」

百々も端末を操ると送られてきた地図と現在位置をすりあわせにかかった。だがいつもなら間髪入れず返してくる曾我にこそ、反応がない。

「バスの運転手とは連絡が取れているのか？」

「無線はバス会社のもがあるわ」

ようやく返されたそれも厳密にいうなら質問の答えになっていなかった。気づいてレフも自ら切り出す。

「手近なセーフティーゾーンに停車させろ。十分もあれば追いつく」

「それが……」

口ごもる曾我はらしくなく、やがてあたう事実は明かされていた。

「止まらないわ。彼の言う爆発物が本当にあるなら、搭載されているETCが高速の料金所を通過すると同時に起爆装置が作動。走行速度が四十キロを切ると爆発するよう設定されているらしいの。警察車両もバックアップに向かっているところよ。バスを止めずに爆発

物を確認、処理して」

だとしてそこで驚いたかといえは車内にそんな気配は微塵もない。代わりにこれでもかと、レフがワゴンのアクセルを踏み込んでいった。

「うん、あたしも面倒臭いやツだっと思ってきた」

果たしてどんな蹴破り方をしたのか。そっとフタをし直すことが出来ないストラヴィンスキーとはそこで通信を終えている。泣き続けているという春山の取り調べに交代を願っているだろうハナが交信へ混じることではなく、辛うじて聞き取れた手作り爆弾の位置を車内床下だ、とだけ聞かされていた。

一通りを頭へ詰め込んだ百々に加速し続けるワゴンの速度を確かめる勇氣はない。

「そろそろ見えてもいいのに」

近付いてきたころ合いに、探すバスの姿へ集中した。

「レフ、あれっ！」

緩やかな登りに並ぶ車列の向こう。ひときわ高い背で四角のテールは路面を走っている。おそらく並走、側面に回ったならピンクのラインに金の蒔絵、ローマ字で書かれた「H I R U Z E N」の文字も読めるはずで、見つけたレフも即座にウインカーを跳ね上げた。

「ソガ、バスを発見した」

滑るように左車線へ移動。ワゴンは先ほどまで前方を走っていた車両を二台、追い抜いてゆく。

「今、運転手と話がすんだわ。ただし爆発物のくだりは言っていない。走行に支障をきたす恐れがあるため赤いワゴンの指示に従うよう知らせてある」

さらにもう一台、追い抜いたところでレフが注意をサイドミラーへと流した。確保した車間距離にワゴンを元の車線へ戻してゆく。

「集団でパニックを起こされても困る」

その前方を、ついにバスのテールは走っていた。

「うん、ナンバーも間違いない」

確認するのは百々の仕事だ。終えたところで、それだけのために乗った車線からワゴンは、再び隣車線へ滑ってゆく。まもなく百々の傍らをバスの側面は流れて、添付資料とおりの文字を確認し終えたところで、ワゴンはその前方へ躍り出た。

百々はリアウインド越し、捻った体でバスの運転席をうかがい見る。運転手は嫌でも気づく赤いワゴンの出現に、明らかとそこで表情を強張らせていた。

「警察車両は？」

マイクへレフも確かめる。

「次のインターでパトカーと移送用のバスが合流予定よ。今、事故車両による交通管制がかけられたことをラジオで流してる。さらに次のインターまで一般車両の通行は減るわ」

「それって爆弾が確認できたなら、走りながらお客さんに移送用のバスへ乗り移ってもらってことですか？」

勘違いできない段取りだ。前へ向きなおって百々も口を開いた。

「爆発物が設計通りに作動するなら制限速度は四十キロ。乗り換えるに不可能ってわけでもない速度だわ。乗せたままどこを解除はできない」

「設計通り、か」

正確を期す曾我の口ぶりは意味深長で、繰り返すレフに百々も嫌な予感を覚える。

「構造の把握は？」

「何かを参照して作ったらしいことは分かっているのだけれど、具体的なことは春山に確認中よ。ハートも遠隔でスタンバってる」

「お兄さん、泣いてる場合じゃないんだけどなあ」

想像したなら苦笑いするほかないだろう。

「俺たちの手に負えない場合は？」

確かめるレフの頭上を「インターまで三キロ」の看板は飛び去っていった。

「処理班の応援も要請している。けれど彼らこそ出前じゃない。それに走行中の車から爆発物を除去することは彼らにとっても慣れた作業じゃないわ。準備がいる。合流するのはまだ先だと思って」

「なら……」

と、ワゴンが速度を落とす。バスとの車間は見る間に詰まり、嫌うバスが隣の車線へ逃げ出していった。そこへワゴンは下がると、みるまに逃げたバスへとすり寄りドアツードアで鼻先をバスに並べる。だからだろう、レフの手も巻きつけていたシートベルトを外しにかかっていた。

「ち、ちよっとっ？」

目の当たりにした百々がどもったことは言うまでもない。

かまわず運転席の窓を下ろしたレフはいえ、マイクへこう吹き込んでいる。

「ソガ、ドアを開かせるよう指示してくれ」

その顔を百々へ向けた。

「あとは任せたぞ」

「へ？」

いや、何を、と問うている暇がない。なにしろにわかにも信じられないという顔を向け

つつも、バスの運転手はもう三つ折りの扉を開いてしまっている。

「移る間だけだ。速度は保て」

アドバイスをよこすレフのおかげで百々の涙がちよぎれたとして、それはレフの心遣いに感動したからではないだろう。とたんハンドルを離し、窓の外へ体を出したレフに至極単純に涙目となったただけだ。現在、時速八十八キロ。「手放し」「クラッシュ」「即死」の三段論法は、百々の脳裏を駆け抜けてゆく。

「ぎやああああっ！」

とにもかくにも端末を放り出すが早いか空を切るハンドルへ全身全霊、食らいついた。

「何、考えてるのよおっ！ 自分がっ、自分があっ、運転手でしようがあっ！」

などとわめいたせいで勢い余ったか。ワゴンは小刻みと蛇行する。

「やたらに切るなッ」

振り回されてレフは怒鳴るが、そもそもやろうとして無茶苦茶なのだ。だからして百々も死に物狂いと吐き返す。

「ムリムリムリ、無理いっ！」

ものの、受付拒否。レフは残した足で辛うじてアクセルを踏みつけると、まっとう過ぎる役に立たないアドバイスを百々へと投げた。

「ハンドルは切るな。バスに合わせてまっすぐ走らせろッ」

「あたしはそこまでバカじゃ、なーいっ!」

「ないなら、やれッ」

それこそハンドルなど放ってその腕でも腹でも掴んで引き戻したい衝動に駆られるが、百々にそんな余裕などない。うちにも箱乗り寸前と、完全にレフは体を外へ出してゆく。風にニットはこれでもかと膨らみ、そこから百々へ声を張った。

「いいか、アクセル離すぞッ。しっかり踏めッ」

「うそ、うそそうぞッ!」

それきり窓枠へ尻を乗せようと身をよじってゆくのだから、百々もついに腹をくくるほかなくなる。

「やっ、やればいいんでしょがっ! やればあっ!」

とはいえ、こんな大役を泣く泣く引き受けていいものなのか。ともかく飛びついたきりの体を起こしにかかる。最後、これだけは外せないとレフへその顔を上げた。

「そ、それで、お戻りはいつですかあっ?」

なら腰を下ろした窓枠から、どうにかのぞきこんでみせたレフの返事はこうだ。

「予定はないッ」

ごもつとも。ゆえに百々も訴えて返す。

「だってあたし、めつ、免許、持ってなあいつ！」

とたんピタリ、レフの動きは止まっていた。

沈黙がそれきりドンブラ、互いの間を流れる。しかもやたらめったら長かった。あまりの長さにレフはまだそこにいるのか、と百々は思わず振り返る。よかったと胸をなでおろしていた。レフはまだそこにいる。

「ホントだってば」

浮かべる情けない笑み。

目もくれず、やがてレフは運転席へ戻ってくる。百々からハンドルを奪い返すと、黙々、風の吹き込む窓を閉めていった。

「い、言って、なかったっけ？」

定位置へ押し戻され、百々も放り出していた端末を拾い上げる。

「聞いていない」

「げ、原付なら、あるんだけどねっ」

歌うように返してみるが正直、それこそ知らない情報だった。いらなさ過ぎて、手に取るようにレフの苛立ちだけが伝わってくる。

「なんのためにいついてきたのか、とか考えてるでしょ？」

詰まるところ、無能のおかげで全てが台無しだった。誰より百々がそう痛感する。

「ついでに使えないやつだ、とか思ってる」

被害妄想でない証拠に、レフも何ら返してくることはなかった。ただ「インターまで一キロ」と記した看板だけが互いの頭上を通り越してゆく。

「別の方法を考えるだけだ」

閉めた窓に、なおさら車内は静けさを増していた。ふさわしくも冷静極まるレフの発言は、ありがたいほど前向といえよう。だが知れるのは、決して百々の不甲斐なさをかばってのものではないということだけに、むしろ言葉は百々を刺した。

何しろ可能、不可能のいずれであろうと人命と抱き合わせのこの仕事である。個々の都合で放り出せやしない任務は常に超個人的課題の連続で、そこに百々の事情など汲んでおもんばかる道理などありはしなかった。

だとして偶然、巻き込まれただけの百々である。少しは考慮してくれてもいいじゃないか。憤らずにはおれない。開き直るその姿に、勢い任せと握ったハンドルよろしく果てに誰かを振り落してしまう危うさもまた感じ取ってみた。

それだけは許されない。

過れば一体どうしろというのか。

巡る考えが百々に「責任」を、その二文字を刻み込んでゆく。

とたん時は止まっていた。

ままにとり合うレフへ百々は視線を上げてゆく。そこでハンドルを握るレフは相変わらずの無表情を決め込んでいた。だがいつときだろうと疑うことなく百々へハンドルを預けたのはその顔で、信じたのもその顔だった。

やおら百々は己がシートベルトを払いのける。

「どうした？」

何事かとレフが視線を投げていた。

かまわず後部座席へ移動し、運転席の真後ろへ尻をする。窓を下げれば機会を失ったバスの扉はまだそこに開いていた。

「外の空気が吸いたくなったかも」

見上げて返す。

「外？」

「車酔いとかじゃないってば」

そうしてプールへでも飛び込むかのようにぐるり、首を回し、両手を振って関節を鳴ら

した。最後に靴紐を結びなおせばもう準備は整ったも同然になる。前を見据えた百々に二言はない。

「あたしがバスへ行ってくる。もう一度、近づけてっ！」

「待ちなさい！」

間髪入れず曾我の声は飛んでいた。

反省文はといえば、違う意味で効果てきめんとなる。

「ああーっ！ 指示はダメです。また命令違反になっちゃうからっ！」

「だったらはっきり言わせてもらおうわ。あなたが行ってもしリスクが増えるだけで何の役にもたたない」

それは遠慮の欠片もない、曾我らしい引き止め方だろう。だが百々も承知の事実だけに互いの認識は一致していても安心できた。

「分かってます。何も爆弾を解除しようなんて思ってません。車内、床下ですよ。あるかどうか見てきます。もしお兄さんの言う通りだったらお客さんの誘導、任せてください。これでも劇場で慣れてます。少しでも早くお客さんを避難させないと大変なことになっちゃうっ！」

言い切りやっほー、と窓から顔を出した。風圧は思った以上あり、喋る自分の声が後ろ

から聞こえてくるようではない。それは吹き飛ばされて紙屑とアスファルトを転がる姿を百々に過らせ、だからこそ間違いを起こさぬよう百々は念入りに速度を身へ馴染ませた。

「心配しないで下さいっ」

放つ言葉に迷いはない。

「バスの運転手さんは大型車のプロだし、こっちの運転手だって優秀なハズだからっ！」

そう、いつときだろうと信じてレフは百々へハンドルを預けたのだ。百々が信じぬ道理こそない。

「そう言うことだよねっ！」

ひと思いに窓枠を掴んだ。

「そういう……、ことだッ」

その耳へレフの声は届いて、その心地よさを糧に変えて胸まで一気に外へ出る。

「だったら脇道からサポートできる一般道へ出てからにして」

それでも食い下がる曾我の口調は、キレと重さを兼ね備えたボクサーのパンチそのものだ。

「だめだ。歩行者がいる。信号のない交差点も厄介だ。高速なら障害物はない。いいなッ」
かわしてレフが応戦していた。矢継ぎばや百々へ呼び掛ける。

「このままで行くぞッ」

バスの運転手とはいえ、頭を突き出した交代選手の頼りない様子にさらにうろたえている様子だ。さすがに笑って返す余裕はなく、百々はそれが返事と拳でワゴンの屋根を叩いて返した。

合図に変えてワゴンはバスへ近づいてゆく。なおさら気を遣わなければと思ったに違いない。バスもまた扉の位置を合わせて速度を調節し始めた。

「持つて行けッ」

最中、下ろされた窓からレフが突き出したのは、木製の持ち手がよく手に馴染むナイフだ。

「バスを掴んだら迷うなッ」

預けて初めて有効なアドバースもまた投げよこす。

受け取り百々はジーンズのポケットへねじ込んだ。ひねった体で窓枠へ腰かける。

いつしかインターは通過していたらしい。前方に、合流した警察のバスが二台、先導するパトカーが三台、見えていた。振り返れば高速機動隊と思しき白バイも追いついて来ている。そんな両者の間から一般車両の影はきれいさっぱり消え去ると、エセ情報が十分効いていることもまた知らせていた。のみならず百々の目に、開いたままの扉の中も映り

込み始める。

近年増えたお年寄りにも優しく、そもその用途を度外視して百々にすら優しい乗降口脇の手すりはそこにあった。むしろ他には何も見当たらず、目がけて百々は恐る恐るだ。手を伸ばしてゆく。

だが手すりは触れそうで触れない。まるで百々を試すかのように指先で前後し続ける。風圧にさえ邪魔されうまくゆかなかったなら、繰り返し続けたその果てに苛立ちさえ覚え始めていた。

と、ついに時は訪れる。

「今だ」と誰かが背を叩いて知らせていた。

合わせて百々は身を投げ出す。

手すりへ強く、両の指を絡ませた。

とたん異なる二台の振動はふるい落とさんばかり百々を襲い、その下で猛烈とまたいだ路面は流れて風を吹き上げる。光景の凄まじさに過るものがあるとすればレフの言葉しかないだろう。追いつてられるままだ。百々は手すりを引き寄せていた。抜け出た体が風圧で飛ばされそうになったなら、力の限りワゴンを蹴りつけバスへ飛び移る。

転がり込んだ場所は昇降口のステップも最下段だ。おかげで覚えたのは、ふともすれば転

げ落ちてしまいそうな錯覚だった。もう血眼になる。手繰るままに這い上がっていた。並ぶ座席の前へ転がり出たところで、向かい合ういぶかし気な目に目を前に、今度は固まる。何か言わなければ。

思っていた。

だがこんな場面にうってつけの言葉など、この世にあるはずもない。ないなら愛想笑いはずと浮かんで、場をつなぐだけの愛想笑いの期限などたかが知れたものと思い知らされる。

ええい、ままだった。百々は意を決する。

「お、お待ちせいましたましたっ。バスガイドの百々でえすっ!」

いや、いったいどこにこんな乗車の仕方をする添乗員がいる。

「あんだ、何しとるよ」

早々、最前列の老人につっこまれていた。うろたえていればまた別の年寄りが顔をのぞかせる。いやよく見れば乗っているのは年寄りばかりだ。

「不審者だ。転がり込んできおった」

知らせる言葉は物騒すぎて、とたん車内にざわつきは広がっていった。

「いや、あ、ちっ、違います。こ、このバスはっ……!」

これで拳銃を提げたレフが転がり込んでいたなら、どうなっていただろうか。考えずにはおれず、でないなら挽回の余地はあると百々は用意してきた口実を口にしかける。

「バ、バスについて、お知らせいたしますっ！」

だが冷静になればなるほどだった。果たしてそれは明かして収まるような内容なのか。

「しっ、車両は……」

あろうはずもないなら間際で強制されるのはシナリオ変更に他ならない。

「車……内に、緊急の忘れ物があると、お客様からのご連絡をいただきましたっ！」

ナンセンスだろうと何だろうと言いつつ切っていた。

「すぐにもお届けに上がらなければなりません。皆様、ただいまよりお足もと確認させていただきます。ご自分のお荷物を全て膝の上へ。ご協力お願いいたしますっ！」

そのしくじれなさに気迫こそこもったか、ざわついていた車内もしばし静まり返る。

「そんなに急ぐんモンがあるんか？」

やがて声は上がっていた。

「あり、まあっすっ。人命にかかわる大事な忘れ物ですっ！」

突き返せば老い先短い年寄りたちだ。「人命」の二文字は効いたか、そらえらいことだ、どんなものだ、と声も飛び交い始める。

「お足もと失礼、しまーすっ!」

逃すものかで確かに忘れ物と言えは忘れ物の爆発物を探し、百々は床へ這いつくばった。「ハナが春山から爆発物の設計図と位置を聞き出したわ。非常口手前、通路に床下へのハッチがある。その中を見て」

ちようと届いた曾我の声に、張られたカーペットを区切ってはめ込まれたハッチへ視線を飛ばす。

「待て。開けさせるのか?」

レフが口を開いていた。

「そこまでだ。触るな、ドド」

ハッチへ駆け寄る百々を制する。

「かまわん、今すぐ開けろ。解除コードを残す腰抜けだ。自分が吹き飛ぶ。そこに細工はない」

間髪入れず割り込んできたのはハートだ。

「それも手口なら?」

かぶせるレフは用心深い。

「どっちっ?」

「ないようだけどなあ」

翻弄されて百々はかみつき、傍らで両足を上げた年寄りへ振り返った。

「おじいちゃんっ、ちよっと黙ってっ」

耳へハートの語気は強められる。

「開けろ」

信じなければやっていられない。

「わかったっ！」

踏みつけられているせいで、埃がたっぷり塗りつけられたそこへ百々は指を押し込む。収納されていた握り手を回転させて、左右そろったところで気合いもろともハッチを引き開けた。

「何をしよるんじゃ？ そんなところに忘れモンが、入っとううかの？」

ご名答。爆発も何も起きない。ただ聞き流して百々は中へ頭を潜り込ませる。せり出す荷物室のせいだ。その半分は塞がれていて見通せなかった。残り半分は油臭さを漂わせる。と何が何やら駆動部分と思しき構造を薄暗がりの中、遙か下までのぞかせている。

「く、暗くてよく見えませんうっ！」

「どないしたんや。あったんかいな？」

周りではいつからか、年寄りたちが見下ろし頭を突き出していた。

「わかんないよお」

「それ、お嬢ちゃん」

と声は百々を促す。

「そこになんかついとるけど、それは違うんか？」

引っかかりそうになりながら、百々はどうにか頭を引き抜いていった。年寄りの指し示す、引き開けられたハッチの裏へ視線を流す。とたん顔を引きつらせていた。

いや、それが必要な部品ならビニールテープで張り付けられていやしないだろう。どこにでもありそうな基盤と電池ボックスはハッチに、色とりどりのコードを穴へ垂らし張り付けられていた。

とたん百々の口から、おおおおお、と漏れ出る謎の唸り声。引きずりバスの先頭まであと戻ったなら、駆け降りるステップは際下段までが必須だろう。屈み込んでめいっばいだ。ひそめた声でオフイスへ知らせた。

「まっ、また爆弾みたいなの、見つけちゃいましたあっ！」

「ようし、よほど好かれているなら天職だ。戻った時は俺が解除のイロハを教えてやる。楽しみにしている」

豪語するハートに、いえ結構です、断る間もなく、なんですって、と上ずる声を耳にしていた。

「車両不備って爆弾のこと、なんですか？」

嫌な予感にまみれて顔を上げる。

そこで青ざめ見下ろす運転手と目と目は合っていた。

瞬間、ノーと言いた思いは山ほどにも。しかし言ったその先が続きそうにないのだから、追い詰められて百々は笑った。

「え、えへっ……」

しかもめいっばい可愛く。

そのわざとらしさに運転手のまぶたも痙攣していた。収まるのを待たずしてハンドルとへしがみつく。

「今すぐバスを止めます！」

判断は正しい。だが正しくないのだから百々はこうして転がり込んできていた。

「ダ、ダメっ。爆発するっ！」

押し止めれば、素っ頓狂な年寄りたちの顔が百々をとらえる。つんのめるような勢いで運転手もまたアクセルを踏みなおしていた。

「と、止まったら爆発、するっ……?」

その顔に今度は百々のこめかみが痙攣する番だ。

「あ、れ……。あたし何しに來たんだっけ?」

もちろん迅速かつ安全に一般市民を避難させるためだが、そのためにあったタテマエを無に歸したのも己だった。果てにぼつねんと取り残されることとなったのは、迅速かつ安全だけだろう。つまり小細工などしている時間こそ失せる。

「ごめんなさい、車両不備はウソです。このバスには爆弾が仕掛けられています。乗客を避難させればなりません。協力、お願いしますっ!」

ぶちまけ百々は運転手へ身を乗り出した。

「おじいちゃん、おばあちゃんっ、あたしはバスガイドじゃなくてCCTってところから來ましたっ!」

年寄りたちへも振り返る。

だがセクシヨンCCTは匿名ゆえ、知名度ゼロの組織だ。ここぞで悲しいほどに通じない。「なんだ。バカげたことをいいおって」

「しーてー? そらなんのことだ」

「忘れ物たあ、おかしいと思ったわ。さてはあんた、わしらを邪魔しに來たなっ!」

「そうだ、いい年をしてですてにースタジオへ行く言うたもんで、タケシに頼まれて止めにきたんだろ」

むしろ事実が、あった協力さえ脅かす。

「運転手さん、お金払っているのはあたしだからね。止めちゃだめよ。ですてにーまで行ってちょうだい！」

けしかけて、帰れ帰れの大合唱を巻き起こした。

「ち、違いますっ。邪魔なんかしに來てませんっ！」

手を振り上げようと多勢に無勢だ。レフの言う集団でのパニックこそこれで、おさまる目途もたたないなら百々の焦りは募りに募った。

「このまま行って欲しいくらいだけどっ！」

はち切れて爪先立つ。

「爆弾は本当なんデえすっ！ 止まると爆発ジまあすっ！ だから言うこと、聞いてくださあいっ！」

切れた息に吠えたその後、肩を揺らした。

それでもバスは走り続け、年寄りたちの罵声はびたり、そこで絶える。果てに聞こえてきたのはこんな声だ。

「……なんと、あんたはですてにーすたじお行きを応援してくれるんか」

いや、そうじゃない。

「タケシ君とは違うのねえ」

「へ？」

「ツメの垢でも煎じて飲ませてやらんといかんっ！」

だがきっかけに起こったのはどういうわけだか拍手にほかならず。やんや、やんやで気づけば百々はまつり上げられてゆく。

「え、ええ？」

だとしても理由など何だってよい。

「あ、あたしだって行きたいんだもん。年なんか関係ないっ！ みんな同じでえすっ。そのタケシが間違ってるうっ！」

そいつは誰だ、と過ろうと、百々は握る拳で便乗した。様子に「おお」と年寄りたちがわきかえったなら、ご声援ありがとう、と選挙にでも出る勢いで得意満面うなずき返す。なら次に放つセリフはもう決まったも同然となっていた。

時を同じくしてそのときオペレーティングルームのモニターで、赤いランプは点灯する。

皮切りに、それまで順調な運行を示していた青一色の画面は変化していた。

見て取った曾我の視線は迷走するバスのやり取りから跳ね上がり、高速道路監視センターの通信を追っていたオペレーターの瞳も止まった瞬きの中で揺れ動く。

やがて一通りを聞き終えたオペレーターが、ヘッドセットのマイクを握りしめた。ままで曾我へと振り返る。

「四十八キロ先、トンネル内で玉突き事故発生」

「ディステイニースタジオへ、いきたいかあっ？」

百々は拳を突き上げた。年寄りたちが某クイズ番組を知っているとは思えなかったが、テレビ番組よりワントーン低い声はすかさず「おー」と返されてくる。

「爆弾があつたって、いきたいかあっ？」

重ねて煽ればなお返事は勢いを増し、これで移送車へ乗り移る段取りは整ったも同然となっていた。

「みんな、落ち着いて聞いて」

襟元のマイクを引き寄せた瞬間、切り出す曾我に押し留まる。

「四十八キロ先のトンネルで玉突き事故よ。いい？ 渋滞に巻き込まれるわ」

さりとて言うものだから驚くタイミングを失う有難さとは、これいかに。

「三十分で現場を撤収。処理班到着は諦めて」

ウソだ、と言う河原に外へ視線を投げていた。そこでワゴンは踏まれたブレーキに、吸い込まれるがごとくすでに後退し始めている。

「聞いたな、ドド。時間がない。誘導を開始しろッ」

言うレフに代わって移送車が、ワゴンの位置へ下がってきていた。

「て、自分ッ。レフはどこ行くのよおっ！」

光景に問わずにはおれない。

しかしながらのノーリアクションはどういうつもりだ。

「ああ、無視するうっ。この薄情者おっ！」

そんな百々の傍らでは運転手もまたヘッドセットへかぶりついていて。様子に百々が振り返ったとたん、そんな運転手の目と目は合う。ままにうなずき返したその仕草はぎこちなく、そのぎこちなさで一蓮托生、やるしかないと百々へビリリ、伝えよこした。

もう薄情者のことなどどうでもいい。何より頼れるのは目の前の運転手であり自分自身だ。百々は持てる限りの集中力を今ここに集約する。命かけると全身全霊、振り上げた腕でここぞと扉をさし示した。

「ということとでっ、ディスティニースタジオへ行くための新しい車は、あっちでえっすっ！皆さんには今から、あちらの車に乗り換えてもらいまあすっ！」

ならどんびしゃだ。併走する移送車のドアも開放される。中からオレンジの作業服にキャップをかぶったレスキュー隊員は姿を現し、目にした年寄りの間から「おおっ」とどよめきはもれた。隊員はそんな年寄りたちからのお手振りを受けながら、さらにバスとの距離を詰めてゆく。やがて開けろ、と扉を叩いた。

「百々さん、移動を開始させて。速度はぎりぎりまで落とさせるわ」

曾我の指示も飛ぶ。

「待て、待て！」

押し止めて連呼したのはハートだった。

「今、春山が参考にした裏サイトへ目を通した。遊び半分のサイトだ。そうまで厳密に作動するとは思えん。起爆装置は風力計の電圧変動と連動。上げても速度はむやみに落とすな。誤作動の保証はないぞ」

飛び移ってきた張本人だ。確かに百々も不安は拭えなかった。

「おじいちゃんたちには無理だよお」

「大丈夫だ」

と耳にして進み出てきた人物こそ、百々を不審者扱いした年寄だ。

「ですてにースタジオへ遊びに行こう言うとするわしらの足腰を、見くびってもろうたら困る」

そうしてバス後方へ下がったレフは、ついに高速機動隊の白バイにワゴンを並べていた。警戒して何度もワゴンを盗み見る警官は初対面で間違いない。だからして挨拶の一つも挟んでおくのがこれからのやり取りを潤滑にするための秘訣であるということなら知っている。だが生憎そんな状況でもなければ、生来の性格がそれを許そうとしない。

向かってレフはパワーウインドを下ろす。藪から棒と声を張った。

「貸してくれッ」

「で、できますか？」

睨みつけるように百々は聞き返す。

「あまり時間がありません。荷物は全てその場に残して前の方から順番にお願いします」
すでにバスの入口へ片足をかけ、レスキュー隊員が急かしていた。そう、出来る出来な
いではなく現状、やるほか手立てはないのだ。

「一番はあんたからだ！」

心得て佐藤もバス後方へ呼び掛ける。ならあっけらかんとした女性の声は、見えない位置から返されていた。

「あら、あたしなら最後でいいわ。一番後ろに座っているし。前から順番に出てちょうだい。できるわよね？」

「けど、あんた……」

聞いて佐藤は表情をびくもらせる。

「順番ならあたしが一番わかってるわ。タケシにも一言、言いたいしね」
見えているような声は気丈だ。

「急いでください」

遮り、さいさんレスキュー隊員も呼び寄せる。様子に佐藤も決断した様子だった。

「わかった。前から順番で行こう」

最初一人目がおっかなびっくり、移送車へと乗り移っていった。その体を掴むレスキュー隊員に危ういところはなく、今やバスの運転手も並走するためのプロのようなら、百々もこれならいけそうだと確信する。

繰り返しれば要領を得たのはレスキュー隊員だけでなく、年寄りたちもまただった。想像

以上に移動は順調と進み、あつという間に満席となった一台目の移送車が後方へ消え去る。二台目がすかさず扉に横付けとなった。

その頃、移動を待つ列に並んでいるのはといえば、気おくれして列の後ろへ回っていた女性四名だけだ。だがその中にあの声の持ち主はといえば見当たらない。

「えっと、最後の方いらっしゃいますか？」

百々は探して後方へと向かっていった。ならそれは左手の列だ。外を眺める華奢で小さな老婆の姿はあった。急ぎ駆け寄りのぞきこめば、その顔はようやく窓から振り返りもする。「あら、迎えに来てくださったのね」

驚くほど白い髪には緩いウェーブがかけられていた。手入れが行き届いていることを示して艶やかと光る様はプラチナそのもので、縁取る華やかさに添えて乗せられた化粧もまた品良く桜色と儚げだ。

「はい。あなたで最後です」

だがそうして向けられた視線だけ鈍器のように重く、輝石と鋭い。自然、百々の背筋を伸び上がらせる。

「でもわたくし、足が悪いの」
なるほど。かばう足元にあるのは藤色のレース編みが繊細なひざ掛けだ。

「ここに残るわ」

「……はひ？」

言うものだから百々は声を裏返していた。

「だめだめだめですっ。そんな理由になりませんっ！」

だが旅の続きを再開する彼女はもう、ゆうと窓の外へ視線を投げている。仕草は外の景色をヨーロッパの田園風景か、きらめく地中海かと錯覚させ、でないなら百々は急ぎ肩を突き出していた。

「お貸します。つかまってください」

「いつもは車椅子なの」

ならばと振り返る。

「じゃ、おんぶっ！」

ほれほれ手招いた。

「ごめんなさい。わたくしがお願ひするのは殿方だけと決めてるの」

「なんですかつ、それはっ？」

伸び上がれば彼女は「結構」と突っぱねる。

「あなたの力量が信用ならないからです。それに、たとえ歩けたとしてわたくしにここを動

く気はありません。あなた、警察の方でいらっしやるんでしょ。お気遣いは無用よ。お仕事、かまわずお進めになっ

つん、とそれきりまた窓を見やった。

様子に百々のアゴは抜け落ちかける。

「なんとか連れて来ていただけませんか。こちらが手を割くと受け取り側が不安定になります。足の不自由な方ならなおさら危険だ」

レスキュー隊員の声に、所定位置へ押し戻していた。つまり頼りにされているのは百々の方で、いや、それもこれも承知の上の移動だったと思ひ出す。

「わかりました。やってみますっ！」

フン、と抜き出す息は鼻からだ。なんのこれでも「20世紀CINEMA」で日々、カラー刷りパンフレットにチラシを何十部、何百部と持ち運んでいるのである。見た目で三十キロそこそこしかなさそうな彼女なら持ち上がるやもしれない。いや、持ち上げてみせると百々は、座席との間へ腕を滑り込ませた。

「しっつれい、しまあっすっ！」

ぶつける気合で両足を踏ん張る。

「ふっ、た、かつ、ごおおっ！」

だがわずか数秒だ。彼女の体は微動だにせず、百々の息だけが上がって全ては終わりを告げる。

「ふむ、むう、むりらあ」

溶けゆく百々を一瞥する勝ち誇ったような彼女の笑みこそ、不敵の極みといえよう。

「分かりました。健常者収容後そちらへ向かいます」

笑い事じゃない。噛みつきかけてレスキュー隊員の声に「そんな」と百々は空を仰いだ。

「お願いします」と声を張り上げ、視界の隅を横切る何かに気づく。その距離は近く、近さにナンダと振り上げていた顔もそちらへ向いていた。

とたん目と目は合う。

レフだ。

バスのリアウインド越し、ノーヘルで白バイにまたがり猛然とバスを追い上げる姿はそこにあった。

「は？」

釘づけで繰り返す瞬きは必要以上に、が鉄則だろう。

「どう、してっ？」

眩けばフワリ、バイクは傾いて、流れるように隣り合う車線へ移動してゆく。

「乗ってる物が、違ってますけどおっ？」

吸い寄せられて百々も窓へ貼りつけば、レフの口はパクパク動いた。だが叩きつける風にレフのマイクはただの飾りだ。百々の声は届いても、何かを叫び返すレフの声こそ聞こえてこない。

「何っ？」

急ぎ百々は窓を開いていた。やおらレフのアゴが後方を指し示す。

「開けろッ」

辿ったそこに見えたのは「非常口」の文字だった。こうなれば意味するところを無視する方が困難となってくる。

乗り移る気だ。

悟って百々は確かめた。

「本気っ？」

果てに、愚問だったことを思い知らされる。

「……の顔だっ！」

レスキュー隊員を押し止めていた。座席の間をすり抜け走る。座席が据え置かれた非常口へ駆け寄ったなら、貼られた解放手順を目で追った。たった二つの段取りを頭の中へ叩き

込み、図式通りにレバーを掴んで座席を倒す。そこに非常口のハンドルが現れたなら、これでもかと回しに回して動かなくなったらところでハンドルをドアノブに変え握り締めた。

「ココ、出口専用なんですけどっ！」

全体重を傾け押し込む。思った以上にスムーズと浮き上がった隙間から、風がどうっと吹き込んでいた。勢いに非常口は勝手と全開になり、危うく外へ放り出されそうになって百々は車体へしがみつく。バイクはそんな百々めがけ、吸い寄せられるように近づいていた。

「邪魔だ。どけッ」

怒鳴るレフはもう片足を抜いている。

目にして百々は飛び退いた。

蹴りつけられたバイクが蛇行する。

風を受けていつとき確かにレフの体は宙に浮き、肩からだ、非常口へ転がり込んだ。取る受け身でそれきり座席へ体当たってゆく。

勢いにも音にも、百々は声を上げていた。

まもなく座席の間からレフは、しなるように体を起こすがそれだけだ。ふらつく足も、騒然としたこの空気も、歪んだ襟ごと整えなおしてしまふ。

「バイクの交渉に手間取った」

いやまず、イタイ、とかなんとかないのか。

「あは、は、は。だってバイク、あれだもん、ね」

引きつり笑うが精一杯だろう。主を失ったバイクももんどりうつとはるか後方、確かに行き倒れている。

「それどころじゃないっ、あのおばあちゃん歩けないし、ここから出たくないって我がまま言ってます。扉前までお願いしますっ!」

おかげでどこぞへかき消されそうになっていた本題へ、百々は全力投じて立ち返った。

「聞いていた」

吐いて彼女を見定めたレフと狭い通路ですれ違う。

「知り合いにロシア空軍がいて助かった」

言うものだからつつこんでいた。

「あのバイク、一体、何と交換したんですかっ?」

「まあ、驚いたことをなさる方なのね。その要領で力づくというわけかしら? 屈辱的だ」と

彼女も呆れた様子だ。薄い眉を跳ね上げている。

とはいえ今はやむなしだろう。何しろ命がなければ人権もない。なにがどうだろうとサッ、

とさらって、とつとと降ろす。これが正義だと思えない。

が、レフはとえいば、彼女の前で姿勢を正していた。ここまで来て、あろうことか落とした腰でひざまずきさえる。

「マダム、ご協力願います」

セリフに百々の脳天で毛は逆立っていた。

「いいえ、わたくしは間違えていません」

従えて落ち着き払う彼女に目玉を白黒させる。

「ちよおつとおうっ！」

「では理由をうかがいたい。これは我々の義務であり、わたしの仕事だ。引き下がるなら理由が必要となる」

「いいでしょう」

優雅なまでにゆったり彼女がうなずけば、己が脳裏でスクロールする「絶望」の二文字を百々は止められなくなっていた。

「この旅を言い出したのはわたくしです。二人だけでなくともかまわない。大事な人と巡り合えた、その思い出を残したいと思いました。それをいい年をしてと世間体を振りかざす。全くもってつまらない言い分です。その言い分であたしの生き方は恥ずべきだと言い負か

したいのでしよう。分かっていましてよ。それがこの騒ぎの正体ですね？」

タケシに頼まれて邪魔しに來たな。

不可解だった言葉がふい、と思い出されたのは、その謎が解けたからだろう。

「屈するつもりなどありません」

きっかけにして、百々も彼女の話へ吸い込まれてゆく。

「そもそも偽らない思いを恥じて一体何が恥でないというのですか。従わせるべくこのような行為こそ恥ずべく愚かな行いです。応じて自らを貶め、名誉を傷つけてまで生きてゆくなどまっぴらごめんです。信ずるところは曲げません。それがここに残るわたくしの理由です」

重みは彼女の言葉にこそ宿り、一本、通る筋に鋼のごとき意思の強さを感じ取っていた。その感触に何かを思い出しかけて百々は押し黙り、レフもまた安易な相槌を打って返すマネをしない。

「人などしょせん、泡のようなものです」

教える彼女の声は低かった。

「この身はいずれ弾けて消える。老いたならなおさらわかるそれが現実です。なら守るべきは弾けた後も残るものではありませんか？」

問われて思い出しかけていたモノは、ついに百々の前で明確な像を結ぶ。

「パス、ボム……」

年齢規制などかかる余地もない現状の、天と地ほどの差もある年齢差だったが、彼女は己に正直だからこそ奔放だったあの主人公とピタリ、重なっていた。おかげで映像に引きずられることなく映画は百々の中へずとんと落ちると「偽ることのない思い」というくだりを激しく明滅させる。

その片隅で田所がまた、がっかりしたと百々へこぼしていた。あのとき即座に正せなかったのは動揺したせいにはかならない。だからといって居心地悪さに放り出して逃げたなら、彼女が嫌うとおりの自らの名誉もまた汚されたままとなるハズだった。それは互いが顔を会わさなくなればなるほど拭い難くなるだろう。そして正す者のいなくなった記憶はやがて、真実と田所の中に息づいてゆく。

「弾けた後に漂う香りが、魂という香りが大切なのです」

気づけば食い入るように聞いている。おかげでその名を聞き逃しそうにもなる。

「タケシは、春山タケシはあたしの孫です。仕掛けたのはその子ではなくて？」

まさに二度見だ。彼女の顔をとらえなおしていた。果てにやはりモザイクが欲しい、と思えるだけの過激なセリフは放たれる。

「ええ、吹き飛ばしたいなら吹き飛ばせばいいのです。引き下がるつもりはありません。ここにはあたしの生き方が、これまでの人生がかかっているのです」

「ならば貫くことで我々を危険にさらすことも、あなたの生き方の一部だと言うのですか？」
レフが間髪入れず食い下がっていた。

「早くしてください！ 前方に車が見え始めてます！」

前方から運転手も悲鳴を上げる。

「間に合わん。ドド、手順を説明するぞ」

見限るハートが指示していた。

「あつ、あたしが解除するんですかっ？」

「そうだ。その白騎士は役に立たん」

言われて思わずレフを見上げる。

なるほど確かに白馬ならぬ白バイにまたがり現れた、それは白いニットの白人だった。そして生粋の姫はとてつもなくテオオンバときいて、手が離せそうにない。何より断った地点で百々自身、吹き飛ばパーセンテージは各段と跳ね上がる構造だ。

「だ、が。わっ、わっ、かりました」

言うほかない。そして言ったからこそ肩をいからせきびすを返す。開きっぱなしのハッ

チへ覚悟を決めて腰を落とした。

「これって危険手当とかつくんですよね」

「そうだ。期待して張り切れ」

などとハートの返事はもう、安請け合いにしか聞こえてこない。

「……それは、違います」

混じり、絞り出すような彼女の声はしていた。

「それもまたあなたの生き方であれば、あなたが守りたいものは結論のみにあるのではない。その姿勢を崩さない限り、たとえここで引き下がったとして損なわれるものなどないはずだ」

こうも切羽詰まった時にする、それは話か。理屈を追えば百々の頭は混乱しそうになり、心の中で「ぎゃー」と叫んで振り払う。

「でっ、どうすればいいんですかっ？」

「電池ボックスには触れず、基盤脇のテンキーパネルを確認しろ」

二つ三つ、よけいにキーを一押ししてしまいそうな小さなパネルは、基盤の片隅に貼り付けられていた。

「解除番号を放り込め」

百々はイエスサーで尻ポケットから端末を引っ張り出す。確認しかけてそれきりだった解除番号を呼び出した。

「ながっ！」

言わずにおれないそれは、この期に及んで四桁ずつで区切られた悪意さえ感じる二十桁もあるランダムな数字だ。

「わたくしを理解している。あなたはそうおっしゃりたいわけなの？」

別世界と、背で彼女が問い返している。

「侮辱するつもりはない。それが証明だ。だからこうしてあなたの協力を待っている」

なら自分にも援護を。百々は心の中で毒づき、かなわぬなら奥歯を噛みしめテンキーパネルへ指を伸ばした。触れかけて震えていることに気づき、かじかむ手を温めるようにひっこめ胸元でこすり合わせる。

「まだですかっ！ 早く、早くして下さいっ！」

金切声だ。運転手も修羅場らしい。

そしてそれを最後に背で会話は途切れていた。

おかげで気が散らないなら今しかない。百々は基盤へかじりつく。間違えたならゲームオーバーだ。区切られた四桁ずつをありえぬ慎重さで入力していった。

はずが、邪魔して手元へ影は落ちる。見えない。思えばしかめっ面だ。頭上を仰いでいた。そこにむしろお前こそ邪魔だと言わんばかり、またいでゆくレフの尻を見つける。

「ちょ、ったっ！」

喚けば通路は狭すぎ、後頭部なんぞを蹴られていた。

「なっ、なんなのよおっ！」

悪態も出てしかり。しかし続くことなく戦意は目にした光景に、ことごとく萎えもする。「……し、下々は蹴られます、です。はい」

ほどに、かなわないのだ。のぞいた横顔は幾つになってもけがれなき姫そのものと、レフに抱え上げられた彼女はひざ掛けをドレスとなびかせ移送車へ向かっている。

待ちくたびれたレスキュー隊員が、その小さな体を受け取っていた。慎重に移送車へと引き込まれてゆけば、見えなくなるとたん辺りに世俗はこれでもかと舞い戻る。

「ぼっ、僕はどうなるんですかっ？」

証拠にあられもなく顔を歪めた運転手がツバを飛ばしていた。

「解除できるのかッ」

容赦ないレフの怒号も百々へ飛ぶ。

「しかないでしょっ！ あたしは運転できないんだってばっ！」

その態度の差は何だと言いたいが、現状、噛みついていて暇がない。百々は返し、否やレフが運転手を引きずり下ろした。代わって抱え込むほどのハンドルを握りしめたなら放り出された運転手こそ一目散だ。

格納した移送車が隣り合う車線から後退してゆく。そうしてついに車内から、一人残らず一般民間人は消え去っていた。

「番号、入った」

「上出来だ。これで止まると理論上は言うが、念のために物理遮断もするぞ。見えるコードの両端から三本づつを手繰れ」

間違いないだろうな、などと素人相手にネガティブなことを口にしないハートはやはりプロだ。淡々と次を促し、聞いてうなずき百々も基盤から下がるコードを手取る。

「揺れるぞッ」

知らせるレフの声は唐突で、詰まった車間を避けてバスは車線変更、反対車線へ飛び込んでいった。

「だひゃっ!」

振り回されてつんのめり、よれた体を百々は起こす。とにもかくにもコードだ。並べて右左から三本を手繰った。

「これで最後だ」

言うハートの声はお守りに近い。

「ドド、中央に残った一本を切れ」

にもかかわらず二本、コードは百々の手の中によじれて残る。

よもやと百々は確かめていた。だがむしろ、三と言う数をかぞえ間違えることこそ困難となる。

「あ、あの、二本残った時の方法って、ちゃんとありますよね」

なぜかしら問う口調が遠まわしだ。

「なんだと？ 図面にそんな記載はないぞッ」

それでも十分、意図は伝わっていた。

「じ、じゃあッ！ 両方切っちゃえってことかなッ？」

「バカヤロウ、不用意にいじるな。どれを切るかは作った本人にしか分からん」

無謀の極みとそれこそハートに怒鳴られる。

「悪いが、本人に聞いているヒマはありそうもないッ」

割り込むレフに現状を突きつけられていた。

同時にパスが車線を変える。揺れに呻いて百々は再び床へ突っ伏し、何がどうなってい

るのか、頭を起こし周囲を見回す。そこにトラックは多量の鉄骨を積み並走していた。のみならずいつからか前後左右を一般車両に囲われ、エセ情報も効果切れとバスは高速道路を走っている。

もしこの中で爆発させてしまったなら。

想像は想像するほどに現実味を帯びてゆくものだ。つまり止まるなら、いやバスを爆発させるならこの辺りが限界だと、思いは百々の中で濃くなってゆく。

「だったら、決めた」

急ぎ手が尻ポケットをまさぐっていた。その声は極度の緊張にやたらと高く、不穏を察したハートも問いかける。

「何を言っている」

「あたし、ちょうどいい道具、持ってるんだよね」

借り受けたナイフはこの時のためにあったかのようで、引き抜き百々は適当な刃を起こしていった。

「レフっ、怖すぎて判断つかないよっ！ あたしが切るから任せる。青か黄、好きな方、選んでっ！」

「バカヤロウ、焦るなッ！」

怒鳴るハートの声はことのほか大きいが、物理的には手出し不能と誰より遠い。

「だって早くしないと、周りが車だらけの中で爆発なんてさせられないですっ！」

放ち百々はコードへ刃をあてがった。

「それはお前の妄想だ。爆発はさせん。引きずられて判断を誤るなッ！」

ハートはがなりたて、混じりレフも舌打ち返す。

「青と黄か……。赤か白なら決めていたが、そうじゃないなら残念だ」

「白は品切れだよ」

教える百々をレフは正した。

「勘違いするな。俺のラッキーカーは」

そこで声に力はこもる。

「赤だッ」

否やバスのタイヤがこれまでにないほど軋んだ。それはまさに横っ飛びが相当だ。詰まった車間をぬって隣の車線へ飛び込んでゆく。勢いに吹き飛ばされて網棚の荷物は宙を舞い、こらえきれなかった百々の体も吹き飛ばされる。上へカバンは降り注ぎ、まみれて座席の足へ百々は頭を打ち付けた。そのさい手元に覚えた鈍くも頼りない感覚は何だったのか。

「だからどちらも切らないッ」

シェイクしたハンドルを切り返し、レフは呼び寄せる。

「バスを止めるぞ。ドド、前へ来いッ」

「従え、ドドッ！ 切れば確実だが現状は二分の一の賭けだ。切る、切らない。同じ賭けるなら解除番号をかくまった春山に賭ける。ヤッこそ真正銘のチキンだ。解除動作は作動する。信じるッ！」

ハートも認める、それは取り調べの一部始終が物語る筋の通った優先順位のつけ方だった。

「りよ、かい」

百々は痛む頭を持ち上げる。運転席を睨んでうなずき返した。視線が落ちたのはその時で、とたんこれでもかと悲鳴を上げる。

「どうしたッ？」

響きにさすがのレフも焦りを隠せない。

答えてわなわな、百々は己が手を持ち上げていった。

「にっ、二本とも……、引っこ抜いちゃいましたあっ！」

どうやら爆発物の素人仕様は、どこまでも大雑把が味らしい。今しがたの衝撃で引き千切ったと思しき二本のコードは、しっかりとその手に握られていた。

しかしバスは平穏と走り続け、この失態を責める者こそ現れない。ただあっけにとられたような沈黙だけが車内を、つながった無線の隅から隅までを覆い尽くしていった。

その果てからやがてハートの声は絞り出される。

「……グッジョブ、だ」

詰まった車間にバスが速度を落としていた。山肌に削り貫いて作られたトンネルの入り口が、フロントガラスの向こうにのぞく。それこそが曽我の手腕なのだろう。通行止めだと思いこんでいたにもかかわらず、トンネル前では抜かれた覚えのない緊急車両が徐行の措置を取っていた。

前にして激走に疲れたバスのタイヤは、粘るような余韻を残して止まる。

気づけば午後だ。アイドリングを続けるエンジンの振動が心地よかった。百々はどっかと床へ座り込む。虚脱感に格があるのかどうかは定かではないが、それはまさに格別の瞬間でもあった。

なにしろ車窓から覗く空はどこまでも高く青い。見上げたなら今頃、年寄りたちはどうしているだろう、と思わずにはおれなくなる。きつとあのパワーで車内を制圧すると、ディスプレイスタジオへ向かっているに違いないと想像した。いや違ったとして疑うなどナンセンスだ。残り香はそこに淡く漂うと、形をいわず思いを記憶へそっと刻み込んでゆく。

だが百々の現実はいえ、弾ける前とまだそこにくつきり浮遊している様子だ。

「で、今度は全然、進まないんだよね。あは。いつ抜けられるんだろ、渋滞」

問いかけたならレフが答える代わりと、ラジオをひねってつける。

高速からバスを退避させ終えたのは、それから二時間余り後のこととなる。インター出口には準備万端、爆発物処理班が待機すると、爆発物は前もって確保されていた取り壊し前の浄水場跡地で撤去されていた。

もちろんワゴンはレフが勝手と交換したため、帰路は借り受けたパトカーだ。飛ばしてオフィスのたどり着いたのは、それからさらに二時間あまり後のこととなる。

果たして白バイ警官が律儀なのか、それとも交換したモノがよほどレアだったのか。ワゴンはそんな百々たちより先に地下駐車場で休んでいたのだから驚きだろう。

眺めつつオフィスへ降りた百々は結局、交換景品が何だったのかを聞いていない。何しろ時刻はもう午後四時をまわろうとしていたうえに仮眠室から飛び出して以来、呑気と飯など食んでいる時間もなかった腹は、今や限界を超えて余分な労力をことごとく嫌っていた。もちろん途中、何かしらをかきこむ機会はあったが、相手はむき出しの銃を下げたままときている。そもそも店へ入れず、そしてコンビニでパンの一つも買い求めるくらいな

ら軽い報告を終えたその後、すっかり味わいたいと我慢は続いていた。

思うところはレフも同じらしい。だからして確認するまでもなく、こうして曾我への報告もすまされている。

が世の中は思った通りにいかない様子だ。無情にもシーンは朝のそれへ巻き戻されて百々は仮眠室のテーブルへかじりつくと、銃をおろしたレフは隣で漢字検定の問題集を読みふけていた。

そう、レポートはまだ提出できていない。これを非人道的だと、労働基準法に反していると訴えようと、もともと基準にかなう職場でないのだから義務を果たして権利を得るしか手はない。

もうテレビはつけていなかった。黙りこんではいるが、レフは組んだ足を小刻みに揺らしている。おかげで揺れるテーブルを百々は突き立てたペンで押さえ、残りを詰めた息で書きなぐっていた。

恐ろしく悪い雰囲気の中、そうしてレポートはついに書き上げられる。目を通すレフの面持ちは真剣そのもので、最後三枚目に達したところで口はモノ言いたげと動きもした。「なかなか気持ちがいもっている」

堪えたレフの、それがオペレーティングルームで曾我へレポートを渡した時の言葉だ。

それきりレフは内容を確認する。曾我の返事を聞かず、追いかけてきた百々を押し出しオペレーティングルームを抜け出している。

だからしてやられた、と曾我が顔を上げた時はもう手遅れだった。呼び止めようにも応じるつもりがないのだから、その背は通路を走っているのだろう。

「ちよっと、これをチーフに見せろっていうの？」

その通りとレフが口元をうごめかせた最後三枚には「ごめんなさい」の文字がひたすら書き連ねられていた。

「食堂？」

百々は目を輝かせる。

確かに上には入院患者ひしめく病院があり、夜勤もあるうえ気安く出入りすることのほばかれるこの場所だ。そうした施設があってもおかしくなかった。

「病院食のアレンジだが食えなくはない。メニューは限られているが無料ときている」

「うっそ、もっと早く言ってよ。食べにだけ来てたのに」

「だから言っていない」

「どうしてっ！」

オペレーティングルームを抜け出しレフに連れられ、チーフ室前で百々は道なりに通路を折れる。直前、貼られていたプレートには、この先にヘリの格納庫と重火器の保管庫があると示されていたようだが今、それら物騒な場所に用はなかった。

薄暗い通路の先、オアシスかと光を漏らす食堂の入口へ急ぐ。レフもろともなだれ込めば、長机とパイプ椅子が典型的な食堂は百々の前に広がった。少々疲れた観葉植物もこういう場所にありがちで、入ってすぐの壁に掛けられたメニューはすぐさま目に飛び込んでくる。

時間が中途半端なためか厨房に人影は見当たらないが、呼べば顔を出すに違いなかった。百々はレフもろともメニューへ駆け寄る。つけられたバツ印の中から残る唯一の品へ目を走らせていった。果てに読み上げるまでかかった時間は心理的抵抗のあらわれだろう。だから吐き出されたレフの声も、これ以上ないほどと地を這う。

「……善哉《ゼンザイ》」

漢字検定、準一級。この期に及んで読み間違えなどあろうはずがない。

「このあんかけそば、こっちのコロッケカレーでもいいよっ！交渉だよっ！ ロシア軍のなんとかと交換しようよっ！」

百々の訴えは本気だ。ほどに腹具合が逼迫していたなら、レフのそれはなおさらに間違

いなかった。両眼を、宿敵にでも出会ったかのように窪ませてゆく。極まったところで立て板に水とそれは吐き出されていた。

「病院前、国道向かい。だが横断歩道がない。横切るには迂回が必至。信号の待ち込みで所要時間はおよそ十五分」

何のことか、と百々の目も瞬く。顔へレフは振り返っていた。

「ついて来い。俺のおごりだ。うまいチャイナがある」

果たしてすきっ腹が求めるままだ。二人は再びオフィスを駆ける。

「飛行時間もベテランの域か」

フライトプランの束は分厚かった。指で弾いて乙部は呟く。

春山をさらに現れたヘリのパイロット榊大輔《サカキダイスケ》の務める民間エアポーター社、スカイエアライナーの応接室は、事務室の脇をパーテーションで仕切っただけの間だった。その片隅で有能な人材と機材を失ったオーナーは、先ほどからひどく疲れた様子でうつむいている。

そんな逃走ヘリを検分したのは昨日のことだ。ヘリなら一時間たらずで到着出来る地方空港に隣接したここへ車で倍以上の時間をかけて訪れようと決めたのも、また同じ昨日の

ことだった。

理由は単純だ。どうしてもこの目で確かめておきたい事ができた。それだけのことである。それはデータには上がらない手ごたえ、そのものでもあった。

「まだ若いですが、アメリカで飛んでいたもんで飛行時間は多い方です。腕も確か。そのうえ超がつくほどの慎重派でしてね。どうかと迷った時は奴に任せて間違いないくらいです」

オーナーは榊についてをそう語る。肩をすくめて返す乙部にも異存はなかった。

「慎重派ってことは認めるね」

自衛隊駐屯地へ強制着陸させたあの時、想定通りの反応はむしろ、乙部にとって物足りないと感じるほどだったのだ。

「まあ、危険に敏感なんでしょうな。要領よく、って言葉も似合わないほど理屈通りの奴でしたよ。だからあの夜、天候が怪しいんで帰りは明日にするといい出したのも、そりゃあいつらしいと」

もちろんそれはその後、ビッグアンブル上空へ向かう予定があったからだ。だが、だからこそ腑に落ちない点は際立った。なぜなら検分したヘリに燃料は、今ここで確かめたフライトプランと合致する量を消費したうえで、ビッグアンブルまでを軽くした分しか残さ

れていなかったのである。

取調べで榊は、行く先を知らなかったと話していた。果たして慎重な輩であればこそ行く先不明の物騒なフライトを前に、燃料を入れず飛んだりするものだろうか。疑念は募り、いや、あり得ないと臨界を越える。やがて乙部はひとつ、仮説を立てていた。つまるところ榊の乗ったヘリは、見合うだけの燃料を搭載していた、と。

それが意味するのは必要量を測ることができた、という事実に違いなく。すなわち榊こそ向かうべき目的地を知っていた人物、となる。いや目的地など初めからなかったのかもしれない、とも思い巡らせた。なぜなら榊はあの後、春山を適当な所で捨て置くつもりでいたのだろうか。

そう、状況はこう分析されている。春山は SO WHAT に利用されている可能性が高い、と。

そして夕暮れ間近のベッドタウン。春山のアパートを渡会らへ譲り渡したストラヴィンスキーは、さらに手分けしてヤクザ者周辺を洗い、乙部の後を追うように榊のマンションへ辿り着いていた。

だがそれは踏み込む直前だ。勢い勇んで見上げたストラヴィンスキーの目の前で、榊の

部屋はこもった音と共に火の粉を巻き上げ吹き飛ぶ。